

実践研究

幼児の運動意欲を高める運動遊びに関する考察  
Study of Exercising Play Which Enhances the Motivation  
of Infants for Exercise

村上 咲子<sup>1)</sup>  
Murakami Sakiko<sup>1)</sup>

筒井 茂喜<sup>2)</sup>  
Tsutsui Shigeki<sup>2)</sup>

キーワード 幼児, 運動意欲, 運動遊び, 肯定的承認, 非言語メッセージ

1 はじめに

1.1 問題の所在

幼児は、運動遊びを通して、多様な動きを獲得し、自分の体をコントロールする力を身につけていくとされる(文部科学省, 2013 佐々木, 2014)。また、自分の体をコントロールする力を高めることは、児童期以降の運動技能の習得をスムーズにする(杉原, 2014)。

しかし、近年、すぐに転ぶ・走るフォームがぎこちない・全身をバランスよく使って跳んだりボールを投げたりすることができないなど、自分の体をうまくコントロールできない幼児が増えており、問題視されている(佐々木, 2005; 智原, 2011; 浅見ら, 2015)。この背景には、幼児の生活の中から、いわゆる三間(遊び時間, 遊び仲間, 遊び空間)が失われつつあることで、幼児が運動遊びに興じる機会が減少し、多様な動きを習得できない状況があると指摘されている(中村, 2004; 仙田, 2009)。また、これに加え、近年、運動遊び自体を好まない幼児や運動遊びに対する意欲(以下、運動意欲)の低い幼児の存在も報告されている(野田, 2010; 酒井, 2007)。

マイネル(1981)が「就学前の子どもは強い運動衝動や活動衝動を特徴としている」と述べているように、幼児は元来、体を動かすこ

とが好きであり(広瀬, 2005; 坂原, 2006)、運動遊びにおけるこのような幼児の実態は看過できない問題である。

そこで、幼稚園、保育園では、独自に運動指導プログラムを組み、実施しているところが増えている。しかし、森ら(2011)は、運動指導プログラムを実施している園と実施していない園における園児の運動能力を比較したところ、実施していない園の方が有意に高かったことを報告し、この要因として運動指導は往々にして大人の技術を一方的に指導する傾向があり、その結果、他者との比較を子どもに求め、子どもの運動意欲の低下を招いている可能性があるとする。一方、杉原ら(2004)は、運動遊びの頻度が高い子どもは運動能力が高いことを報告するとともに、幼児期の子どもは一方的に教え込む運動指導よりも自ら意欲的に取り組めるような運動経験が必要であるとし、運動意欲を喚起させることの重要性を指摘している。

小山ら(2014)は「安心を得た幼児は新たな事柄へチャレンジしたいという欲求をもつ」と述べ、広岡(2013)は「自分を受け容れてくれる人がいるという“安心感”は、子供にとって非常に大きな力となる」としている。また、鯨岡ら(2001)は「“安心感”を抱けずに心理

1) 大鰐小学校  
2) 兵庫教育大学

Owani Elementary School  
Hyogo University of Teacher Education